The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	二言語使用(パイリンガリズム)に関する文献目録 : 日本における研究
Author(s)	生越, 直樹
Citation	待兼山論叢. 日本学篇. 1980, 14, p. 39-46
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/56558
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

二言語使用（バイリンガリズム）に関する文献目録

——日本における研究——

生　越　直　樹

目録作成にあたって

二言語使用（バイリンガリズム）の研究はもっぱらヨーロッパ・アメリカで行なわれ、日本ではあまり盛んではなかった。これは日本が単一言語の国と考えられてきたことからくるものと思われる。そのためか，二言語使用に関係する問題として日本で最初に取り上げられたのは、海外の日系人の言語生活であった。最近、帰国子女の教育が社会問題となり、二言語使用の問題がようやく日本国内でのさしせまった問題としてとらえられるようになってきている。しかしながら、この二言語使用の問題は、実は日本国内においてもかなり広い範囲にわたる問題としてとらえることができるのではなかろうか。たとえば、日本人に対する外国語教育の問題や方言使用者の標準語使用の問題などは、この問題と無関係ではありえない。また、アイヌ人、在日朝鮮人、在日中国人という日本国内での少数民族の問題も、この二言語使用の問題と密接にかかわり合っている。これらについては、残念ながら今のところ、二言語使用という観点からはほとんど研究がなされていないようである。この文献目録は、筆者が在日朝鮮人の言語生活を取り上げていくための予備的資料として作成したものである。この目録は当然将来増補していくべきものであり、いろいろとお教えいただければ幸いである。

説明

- この目録は1979年12月までに日本で書かれた二言語使用（バイリンガリズム）に関する文献を集めたものである。主として参考にした文献は

  『国語年鑑』国立国語研究所編　秀英出版

  『雑誌記事索引』国立国会図書館編　紀伊国屋書店

  『文学・哲学・史学文献目録』日本学術会議第１部

  である。

- 目録では各文献をさしあたり、

  〈理論について〉

  〈海外日系人の言語生活について〉

  〈海外・帰国子女の言語生活について〉

  〈在日朝鮮人の言語生活について〉

  〈諸外国における問題について〉

  の５つのテーマに分類した。文献によっては複数のテーマに重複して示したものもある。なお、日本人に対する外国語教育、外国人に対する日本語教育、方言生活者の標準語使用などの問題は、関心はあるが範囲があまり広くなりすぎること、それぞれの分野での目録作成が別途ありうることから、今回はほとんど触れていない。

- 各論文についての情報は

  著者名（発行年），「論文名」『掲載書名（雑誌名）』，巻数―号数（又は通巻数）

  という順序で記した。また、単行本については、

  著者名（発行年），『書名』，発行所

  という順序で記した。

- 各論文は、テーマごとに著者名によって五十音順に並べた。

•複数の著者によって書かれた文献は、代表する一人によって掲出し、共著者名からも引けるようにした。

〈理論について〉

川本茂雄（1967）「二重言語に関連して」『言語生活』189

グロータース，W.A.（1976）「バイリンガリズムについて」『言語』5-10

小池生夫（1976）「バイリンガリズムの研究」『言語』5-10

小林素文（1976 a）「二重言語併用者と通訳・翻訳」『Athena』10

———（1976 b）「二言語併用者の諸問題—言語心理学の立場より（その1）」『愛知淑徳短大紀要』15

———（1977）「二言語併用者の諸問題—言語心理学の立場より（その2）」『愛知淑徳短大紀要』16

———（1978）「二言語併用者と干渉の三類型」『表現研究』27

———（1979）「二言語併用者と価値感」『表現研究』29

芳賀　純（1971）「二重言語生活者の発想と思考」『言語生活』239

———（1976）「バイリンガリズムの心理」『言語』5-10

———（1978）「日本におけるバイリンガリズムの研究—CODE-SWITCHINGの実験結果から—」『研究発表予稿集』（文部省特定研究言語総括班）

———（1979）『二言語併用の心理—言語心理学的研究—』朝倉書店

比嘉正範（1975 a）「BilingualismとBiculturalismの問題」『現代英語教育』1975-12

———（1976 a）「二つの言語，二つの文化」『言語』5-10

———（1979 a）「二言語併用の実態とその研究」『言語』8-10

———（1979 b）「多言語社会における言語行動」『言語と行動』（南不二男編）大修館書店

福沢周亮（1978）「二つのことばと心理」『ことば』2-5

〈海外日系人の言語生活について〉

Aoyama H. (1972)→Suzuki T.(1972 b)

安倍　勇（1965）「ハワイと日本語」『言語生活』167

――――（1967）「ハワイにおける日英語の発音接触」『東京工業大学学報 34

――――（1969）「英語借用語の仮名表記（ハワイ日系学生）」『音声学会会報』132

池田摩耶子（1972）「日系人の日本語　日本語習得にみられる問題」『言語生活』250

井上史雄（1971）「ハワイ日系人の日本語と英語」『言語生活』236

ウエハラ・ユクオ（1965）「ハワイのくらしことば―日系単語―」『日本語』5-11

大島一郎（1976）「ハワイ日系一世とその言語生活の一面」（研究発表・討論の要旨）『都立大学方言学会会報』68

太田典礼（1959）「ブラジル邦人の言語生活」『言語生活』97

小野米一（1978）「移住と言語変容」『岩波講座日本語　別巻　日本語研究の周辺』（大野晋・柴田武編）岩波書店

神鳥武彦（1971）『ことばの生態学』東京堂出版

黒川省三（1975 a）「「ハワイの日本語」研究の問題点」（研究発表・討論の要旨）『都立大学方言学会会報』65

――――（1975 b）「ハワイの日本語・一世の人称代名詞使用を中心にしての一考察」『日本方言研究会第21回研究発表会発表原稿集』

――――（1976）「ハワイの日本語　一世の人称代名詞使用を中心に」『言語』5-9

――――（1978）「ハワイの日本語　日英二重言語話者による両言語切替使用状態の一表察」『言語』7-10

Kuroda Alicek (1972) →Suzuki T. (1972 b)

Kuroda Y. (1972) →Suzuki T. (1972 b)

言語生活編集部 (1967)「一世のことば—米・カリフォルニアの岩垣夫妻の場合」『言語生活』190

鈴木達三 (1972 a)「ハワイ（ホノルル）における日系人—日本人の国民性調査との関連」『学術月報』24-11

Suzuki T., Hayashi C., Nishihira S., Aoyama H., Nomoto K., Kuroda Y., Kuroda Alicek. (1972 b) A study of Japanese-Americans in Honolulu, Hawaii. *Annals of the Institute of Statistical Mathematics* Supplement No. 7

鈴木英夫 (1979)「ブラジル日系社会における外来語」『名古屋大学教養部紀要A』23

長尾　勇 (1977)「ブラジル日系人の日本語母国語の忘却と日本語の教育」『言語生活』308

Nishihira S. (1972) →Suzuki T. (1972 b)

野元菊雄 (1969)「ブラジルの日本語」『言語生活』219

——— (1971)「外地の日本語　ブラジルを中心に」(研究発表と質疑応答の要旨)『都立大学方言学会会報』39

——— (1972 a)「ハワイ日系人の言語調査」『学術月報』24-11

——— (1972 b) →Suzuki T. (1972 b)

——— (1973 a)「ハワイにおける日系人（4）ハワイ日系人の言語調査」『数研研究リポート』33

——— (1973 b)「ハワイ日系人の読み書き能力」『ことばの研究』4 国立国語研究所　秀英出版

——— (1973 c)「日本語と日系人」『比較日本人論—日本とハワイの調査から—』(林知己夫編) 中央公論社

――――（1974）「ハワイ日系人の日本語能力」『計量国語学』68

Hayashi C.（1972）→Suzuki（1972 b）

原口　裕（1975）「訛形の定着　ブラジル日系人の言語調査から」『語文研究』39・40

Han, Meiko S.（1974）「南カリフォルニアにおける日系人の日本語教育について」『日本語教育』24

Higa, Masanori（1970）The sociolinguistics significance of borrowed words in the Japanese spoken in Hawaii. *Univ. of Hawaii Working Papers in Linguistics* 2-9

比嘉正範（1974 a）「ハワイの日本語」『現代のエスプリ（ことばと心理）』（藤永保，星野命編）85

――――（1974 b）「日米教育文化協力事業　ハワイの日本語の社会言語学的研究」『学術月報』26-11

――――（1975 b）The use of Loanwords in Hawiian Japanese. *Language in Japanese Society Current Issues in Sociolinguistics*. Univ. of Tokyo Press

――――（1976 b）「日本語と日本人社会」『岩波講座日本語 1　日本語と国語学』（大野晋・柴田武編）岩波書店

――――（1979 b）→〈理論について〉参照

ヘンリー・一美・早瀬（1974）「日系人と日本語教育」『日本語教育』24

〈海外・帰国子女の言語生活について〉

有馬敏行（1975）「小笠原での日本語教育」『言語生活』281

伊藤克敏（1977）「母国語を忘れることの心理構造」『言語生活』308

小畑圭子（1978）「外国滞在家庭の子どもの母国語補習　日本語とドイツ語の中で」『児童の言語生態研究』9

草薙　裕（1977）「二重言語を使う子どもたち」『教育心理』25-11

近藤　実（1966）「帰国子女教育学級の実際―国語科の授業を通して―」『東京学芸大付大泉中学校研究集録』1966

――――（1969）「帰国子女教育学級の実際（２）―国語科の授業を通して―」『帰国子女教育研究』4

――――（1979）「帰国子女の言語指導について」『帰国子女教育研究』13

高垣哲生（1976）「幼児の第二言語習得過程の一観察記録　日本人幼児のニュージーランドでの一例」『言語生活』302

千野栄一（1976）「小さなバイリンガリストたち」『言語』5-10

東京学芸大付大泉中学校（1979）「帰国子女教育学級における言語の指導（実践研究）」『中等教育資料』400

野元菊雄（1967 a）「帰国者の言語生活」『言語生活』184

――――（1967 b）「在英日本人の子どもの言語生活」（研究発表要旨）『計量国語学』42

――――（1967 c）「ロンドンにいる日本人の子どもの言語生活」『言語生活』189

――――（1968）「在英日本人の子どもの言語能力」『計量国語学』45

萩山昇治（1977）「帰国子女の日本語教育」『言語生活』308

――――（1979）「海外子女と日本語」『言語生活』331

蓮実重彦（1977）『反＝日本語論』筑摩書房

比嘉正範（1977）「帰国子女の言語生活」『環境とことば』（F. C. パン編）文化評論出版

文部省（1976）『海外勤務者子女教育に関する総合的実態調査』（昭和49年度）

〈在日朝鮮人の言語生活について〉

金賛汀（1977）『祖国を知らない世代　在日朝鮮人二・三世の現実』田畑書店

塚本勲（1964）「在日朝鮮人の言葉」『朝鮮研究』35

朴正文（1976）「在日朝鮮人の言語問題」『国語の授業』16

〈諸外国における問題について〉

石川静文（1974）「シンガポールの二重言語政策と華語教育」『名城商学』24（別）

田中克彦（1975）『言語の思想　国家と民族のことば』（ＮＨＫブックス）日本放送出版協会

――――（1978）『言語からみた民族と国家』（岩波現代選書）岩波書店

中島和子（1979）「カナダの二言語教育研究から学ぶもの　母国語維特の重要性の再認識」『海外子女教育』77

西江雅之（1973）「アフリカの社会人の会話―多言語使用」『言語』2－3

橋内　武（1978）「移民に対する言語教育　多民族国家英国の課題」『ノートルダム清心女子大学紀要外国語外国文学』2－1

本名信行（1979）「アメリカの二言語併用教育　その社会的背景」『表現研究』30

増田純男（編）（1978）『言語戦争』大修館書店

宮原認一（1951）「アメリカにおける二重言語児童―その英語教授の問題」『国語教育講座第５巻（国語教育問題史）　各国の言語教育』刀江書院

村山七郎（1973）「ソ連における言語の接触の問題」『言語』2－3

森岡修一（1974）「多民族国家における言語政策―ソ連邦における二重言語併用への道―」『教育調査研究所研究紀要』8

吉田一衛（1976）「アメリカにおけるBilingual Education」『英語教育』25－3

（大学院学生）